

「現代中国の巨人・毛沢東とその時代」

日本で150万部(上下巻合計)を越すベストセラーとなった「ワイルド・スワン」。

祖母・母・自分という、現代中国を生きた女性三代のドラマを、きめ細かな描写と冷静な分析で描いたエン・チアンさん(42歳)は、現在、次回

家の横浜市立大学教授・矢吹晋氏が聞いた。

「なぜ、あえて『毛沢東』に挑もうとしたのですか。」

「毛沢東は、私の年代から上の世代の中国人にとって、まるで『台風』のような存在でした。私は28歳まで中国で暮らし、紅衛兵の一員でもありました。彼は、私の生活、そして10億人の中国人の生活を支配していました。彼は中国をまったく違う国に作り変えてしまったのです。」

なぜ毛沢東が中国を支配できたのか。この謎は、本当には明らかになっていません。孫文はかつて、「中国人は砂のような民族で、ひとつにまとまることがない」と語りました。しかし、文化大革命の時は不思議に中国はひとつの集団に団結した。人々はお互いに監視し合い、糾弾の対象となった人物は、どこにも逃げる事ができなかった」

現在の中国の人々にとって毛沢東とはどんな存在なのでしょう。

「中国大陸にいる私の読者のうち、多くの人が私が『毛沢東伝』を書くことを支持してくれています。『ワイルド・スワン』は、台湾と香港では出版されていますが、じつはまだ、大陸では出版は許されていません。しかし、大陸でも少なからずの人々が、こっそり入手して、読んでくれています。」

読んでくれた方は、読みながら自分たちが過ごした時代を重ね合わせて読むことになりませんが、特に私の父の世代の方は、夜寝むと、もう眠れなくなってしまう。私の父は、自分の欲をすべて捨て去って共産党に生活のすべてを捧げました。しかし、結局、文化大革命では何度も何度も糾弾の場に引きずり出され、ののしられ、暴力を振るわれました。党の要職の座も追われ、

非常につらい晩年を送らなければならなかった。『ワイルド・スワン』を読んだとき、中国の人々は、自分の人生は何だったのか、自分があのかき抱いていた理想は、まったく無駄なことだったのではないかと、と悔い始めるのです」

毛沢東は現体制維持の拠りどころに

毛沢東は、共産党内での実績を築いた55年の連任会から70年に亡くなるまで中国の最高指導者であった。49年に中華人民共和国の建国を成し遂げた一方、68年から70年の大躍進運動、66年から70年の文化大革命など中国社会と国民に深い傷を残した。

だが、生誕百年にあたる昨年には、あちこちで毛沢東の写真が売られ、中国国内が時ならぬ毛ブームに沸き上がるなど、いままも中国の人々の心の中に占める大きさは計り知れないものがある。

毛沢東はさまざまな顔を持っている。農民革命家の顔

もある一方、文革時はまるで皇帝のようであった。書齋にこもる読書家の顔も持っていた。ごく最近では、英BBC放送が晩年の女性スキャンダルを暴露しましたね。

「『毛沢東伝』には、多くの外国人の研究者たちが挑みましたが、外国の方には、私たち中国市民の心の中に、毛沢東がどんな位置を占めているのかは理解できない。いろんな側面が毛沢東という人格の中で統一されている。私自身は、彼に対して、わがままな子供、というイメージを持っていますが、白と黒のように単純に提示できるものではないと思います。たとえば『狂った人間だ』とか、『理解できない人物だ』とかいうものではなく、いろんな面を理解してもらえればと思います」

なぜ毛沢東はあれほどの支配力を持つことができたと考えますか。

「共産党支配を確立した60年代当時は、中国人自らが支配されることを望んでいました。中国では、今世紀の初めから、軍閥が争い、法律のない非常に不安定な生活を強いられ続けてきた。農民たちは、ひと

▶「毛沢東は『理想』ではなく『謀略』で中国を支配した」と語るエン・チアンさん

作として『毛沢東伝』に取り組んでいる。現代中国の巨人・毛沢東と、彼が起した文化大革命の嵐を、どう描くのか。このたび『ワイルド・スワン』出版後、2度目の来日をしたエン・チアンさんに、中国研究

つの法制の下で落ちついた生活を切望していたのです。

建国直前から、本格的に共産党の活動を始めた私の母も、妾というものが存在しない男女平等の社会がこれで実現できると信じた。農民たちは土地を手放すとは考えもしないのに、共産主義に理想を託した。みんな共産党というものを大まかなワケとしてとらえて、そこに自分たちなりの理想を託したのです」

——毛沢東が掲げた中国共産主義の理想が素晴らしいから中国を支配できたとは考えていないのですか。

「中国人にとって、必ずしも共産主義が必要だったとは考えられません。中国の悲劇とは、第三の選択肢が与えられなかったことです。共産党か国民党しか選択の余地がなかった」

——なぜ、文化大革命のような毛沢東の暴走を周囲は止められなかったのでしょうか。「彼が中国を支配できたのは、掲げた理想によるものではなく、むしろ、中国の古い時代の『謀略』を学び、それを最大限に使ったからです。建国後、毛沢東は共産党のな

かで常に孤立状態にありました。身内も友人も彼の意見に賛成するものはいなかった。

毛の周りには、劉少奇、周恩来、朱徳、陳雲、林彪、鄧小平の8人の有能な人間がいましたが、彼は『謀略』によって身近な人物を操り、そして中国人すべてを操ったのです」

——毛沢東は現在の中国共産党にとってどんな位置を占めていると考えますか。

「いまも共産党の結束の柱として存在しているのです。少なくとも共産党という名前を残すためには、毛沢東を批判することができない。個人的に共産党の幹部と接触すると、その少なからずは毛沢東をよくいわないでしょう。しかし、ひとたび毛沢東を公に批判することは、そのまま共産党が解体してしまうことを意味するのです」

——「毛沢東伝」を書くにあたって、どういう方に取材をしているのですか。「台湾では張學良氏に会いました。また、イギリスのエドワード・ヒース元首相、シンガポールのリー・クワンユー元首相、フィリピンのイメルダ・マルコス元大統領夫人、



去年亡くなった、日本共産党の元議長・野坂参三氏にも、生前にお会いしました。

取材の細かい内容について、いま明らかにするわけにはいかないのですが、たとえば

大物ロックスターとのロス同棲が発覚した工藤静香の男狂いの理由

工藤静香(28歳)といえば、あの「おニャン子クラブ」出身の出世頭のタレントであることは周知の通り。これまでに、光GENJIの贈呈和己や、俳優・的場浩司らと噂に上った。恋多き女、としても有名だ。そんな静香が、これまでにならぬほど一人のオトコにイレ込んでいる。カレは超人気ロックグループ「X JAPAN」のYOSHIEKI(本名・林佳樹・28歳)。しかも、そのYOSHIEKIが米

▲66年「プロレタリア文化大革命集会」で、毛沢東は自ら紅衛兵の腕章を着け民衆を鼓舞した

話を聞いています。「ワイルド・スワン」が皆さんの共感を得ることができたのも、そうした人間の感情の細かい部分を描いたからだと思います。

取材のなかで、苦労していることはどんなことですか。「いまの作業は、資料を当たったり、毛沢東と会ったことのある方にインタビューすることです。いっどこで、どんな気持ちでどんな話をしたか、そういうした確認作業のために細か

毛沢東が、まわりの人と話すとき、どんな手振りで、どんな口調で話したのか。こうした人間的な細かい感情や癖などを丹念に取材して、人間・毛沢東を描いてみたいと考えています」

・ロサンゼルスで、逮捕されたのをきっかけに二人が同居していたことが発覚した。工藤静香は、今年初めから8月半ばまで、充電と称してロスへ渡っていた。そのロスには数年前からYOSHIEKIが生活の拠点を移していたのである。そして二人の恋の噂が1カ月前、女性誌に報じられた。その時点では静香の所属事務所「プロダクシヨ

ン尾木」は、「ロスには英語とダンスの勉強に行っただけで、彼と付き合っているようなことはない」と真っ向から否定し、これで一件落着となった。ところが、ある「事件」で二人の熱愛関係が明るみに出てしまった。この事件を報じた「フライデー」によると、二人は3月9日の深夜、ロス市内の日本食レストランに現れた。ブラ

次作のテーマは毛沢東
来日したユン・チアン母娘が語る『ワイルド・スワン』それから

Friday
94.4.15

世界17カ国の読者に圧倒的な感銘を与えた『小社刊』の著者、ユン・チアン女史(42・写真右)がこのほど自著の『ロンドン』のため4度目の来日をした。

同書は、清朝末期から文化大革命の終焉までの1世紀に及ぶ激動の中国史を、柏田、田、娘(女史)の3代にわたる女性の立場から描いた一大叙事詩。

その中でとりわけ詳しく語られているのが今回一緒に来日した母親の夏徳瀾さん(83・左)だ。進歩的な医者の娘に生まれ、夏徳瀾さんは抗日運動を通じて知り合った人民解放軍の兵士ワン・ユイと恋愛結婚、5人の子を育てながら夫とともに新中国建設に邁進するが、ワン・ユイは文化大革命の最中、反共分子の烙印を押されて発狂、哀れな最期を遂げる。

悲劇のうちに夫を失った夏徳瀾さんだが、現在では「野を飛ぶ白鳥」を象徴する夏徳瀾

の一字「瀾」(ユン・チアン女史の以前の中国名は「瀾」という)と「真」(真に新しい中国をつくる)という「志」を継いでくれた娘の成功に目を細めている。「真あれ、抗日戦の闘士だったとは思えないほど、なんとも穏やかな表情をしているではないか。ユン・チアン女史はそんな母親をこう語る。

「母は、非常に恋の強い女性。人にはいえないような多くの悲しみや怒りを、長い間自分の胸だけにしまってきた。『ワールド・スワング』は母が、その体験を全て打ち明けてくれたことから生まれたのです。これに対して夏徳瀾さんは、『この本が話題にならなくても構わなかった。出版されることによつて、私とユンとの愛情が深まれば、それだけでも素晴らしいことだと思っていました』と述懐する。

1978年にイギリスに留学し、現在はロンドン大学で講師を務める女史は、昨

年、次作の毛沢東伝記の取材のため、5年ぶりに母国を訪れた。

自らも紅衛兵として文革に参加した彼女にとって毛沢東は、「私の運命に大きな影響を与えた人」という。「中国の太陽」と謳われた頃の尊敬の念と、父親を死に至らしめた元凶でもある彼に対する憎しみ。この相反する感情にどう決着をつけるか、『ワールド・スワング』の読者は因縁を呑んで見守っている。

中国現代史に詳しい横浜市立大の矢吹晋教授は、「彼女はイギリスに住んでいるので、自由な価値観で肉声の中国史を語ることができる。次作もまた、ベールに包まれた中国現代史を、我々に教えてくれるでしょう」という。

『ワールド・スワング』は私たち家族の話でしたが、毛沢東は中国人にとつての歴史なのです」と語るユン女史。白鳥は再び飛翔に移ろうとしている。